

教職大学院 News Letter 第8号

2019.4.1

Since 2016

協創

にいがた教育フォーラム 2019 in March 特集

3月2日(土)、新潟大学教職大学院院生の一年間の学びを報告し、新潟の教育についてともに考える「にいがた教育フォーラム 2019 in March」を開催いたしました。午前の部では、各種ワークショップ、午後からは院生・教員によるポスター発表、ラウンドテーブルを行い、県内の教員ら午前午後合わせて約300人近くの参加を得て活発な議論が展開されました。

ワークショップ開催の目的と概要

新潟大学大学院教育実践学研究科副研究科長
小久保 美子

本教職大学院は、「新潟県・新潟市の教員養成の先端的役割を果たすこと」を大きな理念として謳っています。「先端的役割」の具体的な内容として、スクールリーダー、ミドルリーダー、有為な新人教員を育成するべく質の高い授業を実施することが挙げられます。その他、学校現場の教育実践の改善に資するべく、各専任教員が有している教育研究のリソースを県内外の先生方に広く提供する機会を設けることも大事にしたいと考えています。そこで、発足後3年目の節目に当たる今回のフォーラムで、各専任教員の教育研究を生かしたワークショップを開催することといたしました。

初めてのワークショップ開催でしたが、次のとおり、多彩な内容が揃いました。



1. 授業の事例検討を通した子どもの学びの分析
2. 連句を創ろう～芭蕉の生きた連句の世界～
3. 小学校英語の授業づくり
4. 中学校数学における探究学習について体験的に考えよう
5. 実感を学びにつなぐ食教育の教材や授業の工夫
6. 家庭や障害のせいにならない不登校支援～「心のエネルギー」をためる行動技法の解説と演習～
7. 学級・学校で活用できるアンガーマネジメントの基本
8. 小学校プログラミング教育をどう創る？
9. 社会に開かれた教育課程をどう創る？
10. 道徳教育における生と死
11. エンカウンターの新しい展開～社会性を育て対話を促進するツールとして～

お蔭様で、200名近い参加者を得ることができました。貴重な時間を割いてご参加くださった方々に、心より感謝申し上げます。これを機に、アクティブに学ぶ教師の文化を醸成していければと考えております。



プログラム

【受付】10:00 - @教育学部棟正面玄関

【午前の部】10:30 - 12:00

①ワークショップ @教育学部B棟

「学校教育に役立つ技術等を学ぼう」

～22人の講師による11のワークショップ～

【午後の部】13:00 - 16:00

13:00 - 14:00

②ポスターセッション @教育学部B・C棟

本学院生の課題研究等について交流

14:15 - 16:00

③ラウンドテーブル @教育学部B棟

1 教育課程編成	2 授業づくり
3 生徒指導・教育相談	4 学年・学級経営
5 学校経営	6 特別支援教育

「WS8プログラミング」を企画して

教職大学院 川端弘実

「小学校プログラミング教育をどう創るか？」をテーマにワークショップを行いました。Excelを使ってデータを処理する時、関数を入力して必要なデータを抽出したり、並べ替えたり、参照したりします。関数を適切に入力すると、複雑な処理も簡単に済ませることができ、実際の体験を通して、プログラミングのよさと効果を実感します。ワークショップでは、講師である片山先生による概論とmicro:bitを使った実践紹介、兒玉指導主事によるロボホンを使った模擬授業体験、どちらもコマンドをプログラムしてランプを点灯させたり、ロボットを実際に動かしたりする実践的なものでした。

グループワーク後のシェアリングでは、アンブラグドの視点、フィジカルのよさ等を実感しながら様々な実践を積み重ねていくことの重要性について意見が交わされました。まだ始まったばかりのプログラミング教育における実践では、一人一人がSeed（種）となり、実践を積み重ねていくことが大切だということを学び、確認し合ったワークショップとなりました。

ポスターセッション

つながる学びへ

学校経営コース現職院生2年 高橋健

2年間にわたり、「キャリア教育の視点を活かした教育活動の実現に向けて」をテーマとして、研究を進めてきました。具体的には、全ての教育活動において児童のキャリア発達の場を位置づけることで、キャリア教育に対する職員の意識の向上を図ってきました。また、「キャリア教育推進委員会」を立ち上げ、キャリア教育を中心に据えた組織体制の改善を行ってきました。

今回は、この2年間の成果として、「キャリア教育を柱とした学校教育ビジョン」について発表を行いました。参会者のみなさまからは、目標系列を整えた学校教育ビジョンへの評価をいただくとともに、キャリア教育を柱に据える意義が十分に示せていないことやキャリア教育を通した目指す子どものさらなる明確化についてご示唆をいただきました。2年間の学びを、次年度以降の現場での学びへとつなげていくための意欲につながる有意義な時間であったと感じています。



・・・参観者の声・・・

◆先行して実践されているお二方から話が聞けてよかった。ワークショップでは、プログラミング教育についての見識を深められた。やはりハードの扱いで苦労するところはあったが、この点を改善していくことがSociety5.0の実現につながる。（WS8参加者）

◆実体験を通してながら確実に学ばせていきたい内容を学ぶことができ有意義な時間であった。様々な研究論文のエキスも聞くことができ、根拠を明確にした学びの大切さを感じた。（WS5参加者）

◆実際に自分が体験することで、子どもの気持ちをより理解できたと思う。特別支援だけでなく、どの子にも必ず必要になることだと思うので、これからやっていきたいと思った。（WS7参加者）

授業の協同開発は生徒の思考を促す

教育実践コース現職院生2年 出口雅也

これまで「中学校理科における主体的な学びの実現～生徒の問題意識が持続する授業の協同開発を通して～」をテーマとして、研究を進めてきました。今回のポスターセッションでは、特に、「理科部員との授業の協同開発」に焦点を当てて提案しました。参会者の皆様からは、生徒の発話やワークシートの記述から、「理科部員と協同開発した実験器具が生徒の思考を促し、科学的概念を形成する一助となっている」との評価をいただくとともに、単元を貫く探究的な学習課題について、「表現を工夫することで、さらに生徒の思考に寄り添ったものになるのではないか」とのご助言をいただきました。全国から来られた校種や教科の異なる方々との意見交流を通して、これまでの研究を振り返るとともに、新たな視点から課題を捉え直すことができました。実践で用いたジェットコースターの模型を囲み、参会者の皆様と語り合うことで、今後の授業づくりのご示唆をいただくことができ、とても有意義な時間となりました。



持続可能な社会を考える授業づくり

教育実践コース学部卒院生 2年 小林亜美



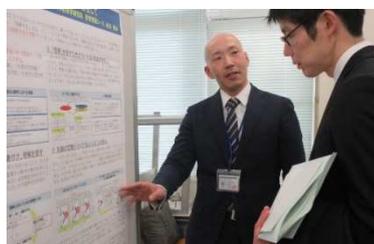
私はこれまで社会的
事象を「自分ごと」と
して捉えることを通し
て持続可能な社会づく
りを考える中学校社会
科の授業について研究
を行ってきました。社
会的事象を「自分ご
と」として捉えるため

には、「社会的事象と自分との関連を持たせる」こと
や「あるべき社会の姿をあらかじめ捉えさせる」
ことが重要であると考え、授業実践を行ってきま
した。ポスターセッションでは、2年間の研究の成
果を発表しました。参会の方々からは、「子どもが
追究したいと思うような教材の提示」や「単元を通
して課題の解決に迫っていく単元構想」などについ
ての助言をいただきました。同じ教材でも扱うタイ
ミングや、活用の方法によって、子どもの学びが大
きく変わってくることに気づくことができました。ま
た、単元を通した課題の追究が深い学びの実現につ
ながるということを学びました。ポスターセッション
は多くの方にお越しいただき、大変学びの多い時
間となりました。これらの学びを来年度からの教員
人生に生かしていきたいと思ひます。

一人一人の「理解」を目指して

教育実践コース現職院生 1年 松田健太

『子ども一人一人が「理解」する授業とはどのよ
うな授業だろうか。教師は、一人一人の「理解」の
ために何をすればよいのだろうか。』と考え、私
は、日々の授業で何気なく行われている「かく行為
(知識の視覚的な外化)」と「対話」に着目し、研
究を進めてきました。今回のポスターセッションで
は、小学校算数科「割合」の授業を例に挙げ、課題
検証実践で得られた知見を紹介しました。参会者の
皆様には、「かく行為」によって理解の程度を明確
にすることや、「かく行為」と「対話」を同時並行
的に行わせていくことで理解に結びつくことなど、
提案について肯定的に受け止めていただきました。
また、「ふり返り」によって学習内容と学習過程の
関連付けを図ることや、言葉を伴わせながら外化さ
せることで学習内容の定着を図ることなど、授業に



における「言葉のはたら
き」について貴重なご
意見をいただきました。
子どもの姿や教師の
在り方について、多
くの方々と語らうこと

ができ、実りある時間となりました。次年度の研究
に生かしていきたいと思ひます。

社会科における「深い学び」を目指して

教育実践コース学部卒院生 1年 松田 涼

『中学校社会科公民的分野における、生徒が「経
済的事象」を概念的に捉えるような授業づくり』と
いうテーマでポスター発表を行いました。

自身の見出した「単元を通した課題設定」と「学
びが深まる対話活動の在り方」という研究課題につ
いて、参観者の方々から「単元の最後で考えさせたい
課題を想起させるものを、単元の頭で扱うとよい」
「教師のやりたいことが、生徒の課題意識から
逸れてはいけない」「特に公民は何でもできる。し
かし欲張りすぎない(焦点化)」「対話で最終的に
目指すのは『自己内対話』による深まりではない
か」等、現在の研究だけでなく、すべての社会科の
授業づくり通ずる重要な視点からのご指導・ご示唆
をいただきました。参観者の方々が、私の悩みや分
からなさに寄り添ってお話を聴いてくださったこと
がとても印象に残りました。交流を通した学びを来
年度に活かすことができるよう、教材研究に励み、
有意義な実践・研究が実現できるように努力してい
きたいと思ひます。

・・・ 参観者の声 ・・・

- ◆それぞれの院生の方がご自身の課題だと思っ
ていることに取り組み、その過程、方法、成果と課題
を丁寧に分析していたところに学びました。
- ◆学級づくりの発表が、とても興味深かったです。
子どもに任せて活動させるのではなく、教師が意
図的に仕組むことが重要だと感じました。

ラウンドテーブル

異質協働

教育実践コース現職院生 2年 佐藤亮一

「多様な人が集まったが、何とかなるだろう。」
ラウンドテーブルのはじめの自己紹介が終わった後
に抱いた思ひです。メンバー構成は、高校教師を目
指す学部 1年生、来年度教職大学院に進学する学部
4年生、現職の教師 2名(専門は小学校外国語と体
育)、そして私(小学校国語)でした。

それぞれが口にした問題意識の共通項は、「子
どもの意欲をどう高めるか」ということでした。よく
ある話題ですが、だからこそ、どの年代にとっても
普遍的なテーマなのだろうと感じました。話し始め
ると、話題は、課題設定の方法、評価の方法、学級
経営の方法まで広がっていきました。結局、90分間

途切れることなく対話は続けました。年齢も校種も研究教科も異なる 5 人が織りなす対話は、非常に興味深いものでした。大げさかもしれませんが、今回の対話は、教職大学院での学びの集大成であったと思っています。異質な者同士が協働する醍醐味を味わわせていただいた 2 年間に感謝したいと思います。



校種間で情報を交換する意義

学校経営コース現職院生 2 年 玉井博史

「社会に開かれた教育課程を推進していくために、自分が管理職だったら、どのような働き掛けを行っていくべきか」について話し合いました。私たちのグループは小学校・中学校・高等学校の各立場で思いを語り合うことができました。その後、「多忙化解消との関連で何をすべきなのか」ということに話題は発展していきました。各校種で系統性を意識することで、やり過ぎている点を見直し、目的に合わないものはスクラップするべきであるという考えにまとまりました。仕事を精選するという視点を得ることができました。教育活動はやらないよりもやったほうが良いに決まっています。しかし、そうやって仕事量がだるま式に増えていきます。次期学習指導要領に向けて、教育目標を見直しています。何をスクラップすればよいのか考えるには、絶好の機会です。この話し合いに参加する前と比べ、やるべき仕事とやった方がよい仕事とを見極めようとする力が身に付きました。

学校経営の視点と管理職の思い

学校運営コース現職院生 1 年 岡田 崇宏

校種の異なる校長先生方と校内研修、幼保小中高の連携、地域との協働など、様々な学校課題に対して管理職としてどうマネジメントしていくかについて話し合いました。共通するキーワードとして「温度差」「お金」が挙げられました。

「温度差」では、職員間、学校間、地域と学校間



などそれぞれの思いが食い違う中で起ってくる。しかし、起こって当然ととらえ、管理職として

それをどう埋めていくかが重要であることが分かりました。それぞれの校長先生の具体的な取組はとも参考になりました。「お金」について、充実した取組を行うためには、どうしても「お金」が必要になってくること。それをどう捻出し、配分していくかが、管理職の重要な役割であることが分かりました。普段はなかなか見たり、感じたりすることができない学校経営の視点や管理職の先生方の思いを感じることができ、充実した学びになりました。

教科の本質的な学びとは？

教育実践コース学部卒院生 1 年 袖山紗矢子

現職の先生 3 名、講師の方 1 名の 5 人で授業づくりについて話し合いました。校種も教科も立場も異なる 5 人でしたが、互いに悩みを話し合いました。

私は、子どもが基礎的知識を得た上でその知識を活用するためにはどうすればよいのかという悩みがあったのですが、教科の見方・考え方が働くことが重要になるのではという意見を頂きました。その方法として問題解決的な体験をさせること、子ども達が追究したいと感じる学習課題を設定することなどの意見が出ました。子ども達が何かを発見したり、条件を変更して実証したくなったりするような教材を提示することで、自然と子ども達が課題追究していくことができるのかもしれませんが、その過程で教科の見方・考え方が働き、教科の本質的な学びが行われているのかもしれませんが。

今回の話し合いを通し、教科の本質的な学びとは何だろうかということを考えてみました。今後も自身の授業をつかっていく中で考えていきたいです。



参観者の声

- ◆ 学生として、現職の先生方から多くのことを聞くことができた。具体的な学級経営の考え方を学ぶことができ、来年度からがんばろうと思えました。
- ◆ 今回、話題提供させていただきました。こちらの内容を超えて、様々な視点で話ができて、学びも多かったです。ありがとうございました。
- ◆ 授業づくりについて、様々な教科の先生方と課題にしていることを共有することができてよかったです。少人数で話し合うことで充実感がありました。校種や地域がバラバラであったことで議論が深まりました。ありがとうございました。

特集「授業」

本学教職大学院の授業について紹介します。

共通必修科目

第1領域「特色ある教育課程の事例研究」

(場所 新潟市立内野中学校)

担当：宮菌衛、小久保美子、高木幸子、兵藤清一

・・・参観した教員の声・・・

教員研修の一環として、内野中学校で開講されている第1領域の授業を参観しました。

授業の大まかな流れは、前回の振り返り、大学院教員と教育委員会指導主事、地域教育コーディネーターによる事例の紹介、教育課程の開発に向けたグループ協議です。

具体的な事例を基にした意見交流や開発に向けたグループ協議には、地域からの参加者も加わり、活発な話し合いが行われました。地域の方の声に耳を傾け、学びを深める姿に触れ、勤務しながら学ぶ現職院生の在籍校で授業を行うことのよさを改めて感じました。

他領域の授業を参観することで、担当する領域との共通点・相違点が明確になり、それぞれの授業の特徴が際立ちます。地域に開かれた豊かな学びを体験し、特色ある教育課程を構想・開発する力は、このようにして高まるのだと実感することができました。(金子淳嗣)

・・・院生の声・・・

私たちのグループでは、総合的な学習の時間の全体計画を作成した。講義を受講する中で、特色ある教育課程の一番の目的は“皆で子どもの資質・能力を育てていくこと”であると学んだ。「新卒だから、教育課程の編成は管理職に任せておけば良い」という考えではなく、地域の人とも連携して、皆で手を取り合って子どもを育てていく。そしてそのために、特色ある教育課程が皆をつないでいくということを実感した半年間であった。

(教育実践コース 月岡千夏)



第5領域「社会のグローバル化と学校・

教師」

(場所 大学と新発田市立猿橋小学校)

担当：宮菌衛、相庭和彦、金子淳嗣

本授業では、現代社会を急速にグローバル化する社会と捉える。その社会において、学校はどのような役割を果たすのか、教師にはどのような視野や見方・考え方、資質・能力が求められるのか、院生と教員が共に考えることを目指している。尚、今年度の授業は毎回、特定連携協力校の猿橋小学校と F206 教室を Web で結ぶ遠隔授業として実施した。

最初に、新聞記事や日常生活の事象を手掛かりに、私たちが急激に変化する世界の中で生き、世界の様々な人やものと繋がり、共に生きていることを知り、自分自身の社会を見る見方・考え方を問い返す学びの必要性を提起した。ゲストによるワークショップでは、見知らぬ他者との異文化コミュニケーションの中に既に特定の見方・考え方が組込まれているという状況を想定して、その問題点について共に考えた。また中国の小学校の英語授業のライブ中継や学校の紹介を通して、広く世界の動向を踏まえて日本の教育実践の在り方を考えた。

(宮菌衛)

・・・参観した教員の声・・・

一見すると学校教育とは遠いテーマのように見えて、とても身近な内容なのだと、多様な講師、先生方のお話から考えさせられました。そして、自分たちは今どこにいて、どのように相手を捉えているのか、グローバルという視点で見ることが自分自身をより大局的に捉えるとともに、相手をも理解し、学ぶことにつながるのだと感じました。それは教室や学校での小さな出来事にも通じる、大切な視点だと気づくことができました。(一柳智紀)



※教職大学院では、ピア・レビューを重視し、どの教員も興味・関心のある科目を各期で一つずつ選び、授業を参観して互いに評価し合っています。

選択科目

「概念変化と学習過程」

(場所 大学)

担当：中島伸子、井口浩、片山敏郎

学びとは、手持ちの知識を再構成していく過程である。そしてそれは学び手一人に閉じた孤独なものではなく、対話や協働といった社会的構成を通して達成される。本講義は、こうした学習観に立脚して学習過程を理解し、教育実践に反映する力を高めることをねらいとした。具体的には、三宅芳雄・三宅なほみ『教育心理学概論』放送大学出版会を毎回読んで授業に臨み、実践に関する協議題に基づいてグループ別に議論を進めるスタイルをとった。またデジタル思考ツールについて実践的授業も取り入れた。上記の学習観は、認知科学や発達心理学等では随分前からスタンダードであり、新学習指導要領にも色濃く反映されている。教員の授業づくりのベーシックになるべきだが、予想以上に浸透していない印象を持つ。これらをベースに授業づくりを進めつつも、実践をとおして理論を再検討する院生が増えることを期待している。(中島伸子)

・・・参観した教員の声・・・

「デジタル思考ツール」を用いた経験は初めてでした。私が小学校教師になった昭和 50 年代初期は、パソコンもコピー機も印刷機も無く、すべて手書きでした。本授業で紹介されたロイロノートというデジタルデバイスを自在に使いこなして、デジタルマインドマップやデジタルポートフォリオを作成して対話し合う附属新潟小の子どもたちの姿に圧倒されると共に、教師が学び続けることの必要性和重要性、そして楽しさをつくづく実感した時間帯でした。

(小久保美子)



【編集後記】

にいがた教育フォーラム 2019 in march 特集をお届けいたします。新潟の教育に興味関心のある方を繋ぎ、その質の向上に貢献できることを願って開催しています。フォーラムに教職大学院の修了生を含め、毎年参加くださる方が少しずつ増えてきています。この学び合いの輪がさらに広まり、大きく花開くことを願って、これからも取り組みを進めていきます。(古田島恵津子)

「学校のリスクマネジメントと法規範」

(場所 大学)

担当：雲尾周、川端弘実

題目の「法規範」から想起されるように、学校と、教職員、保護者および地域住民等の間には様々な軋轢が生ずることがあり、これらに関連した争訟等を学ぶことにより、争いに発展しないような対処方法を身に付けるとともに、それらを普及させる研修手法を修得することが本授業の概要である。

このほか、学校事故・教職員の懲戒の現状、体育・スポーツ活動における安全管理、それに付随しての体罰によらない指導法を学ぶことによる人的リスクマネジメント、学校給食の安全管理や学校保健、いじめ防止対策推進法、児童虐待防止法といった生徒指導上のリスクマネジメントなど、管理職のみならず全教職員に有用な規範意識とマネジメントスキルを育成しており、受講者は勤務校でリスクマネジメントの中核となることができる。(雲尾周)

・・・院生の声・・・

「何をすればいいのか?」「どんな視点をもてばいいのか?」これが受講前の漠然とした不安でした。この授業では、学校現場で起こりうる子どもと教職員に関する多様なリスクへの対処法を、行政機関、弁護士、栄養教諭など、各分野の専門家から具体的に教わることができました。この学びを勤務校の実態と照らし合わせた上で「危機を未然に防ぐ」「被害を最小限に」「適切・迅速に対処」この3つができる教師を目指していきます。(学校経営コース 船山和利)


お知らせ
「にいがた教育フォーラム 2019 in July」
開催日時：平成 31 年 7 月 27 日(土)
ラウンドテーブル等予定 お待ちしています!
新潟大学教職大学院 News Letter 「協創」 第 8 号 2019.4.1 発行
 編集・発行・印刷

 新潟大学大学院教育実践学研究科 (教職大学院) 広報委員会
 〒950-2181 新潟市西区五十嵐二の町 8050

 問い合わせ先: kyousyokudaigakuin@ed.niigata-u.ac.jp

 ホームページ URL: <http://www.ed.niigata-u.ac.jp/kyousyoku/>

ニュースレター、各種案内等は HP に随時掲載しています。